

第38回北洋研究シンポジウム
「近年の噴火湾における海洋環境と漁業資源の変動」—速報—

高津哲也（北大院水）・渡野邊雅道（道函館水試）

2007年1月29日（月）、函館市産学官交流プラザにおいて標記シンポジウムが開催された。目的は、暖流系水と寒流系水が交互に流入して豊かな漁場を形成する噴火湾について、最新の知見を集約し漁獲と環境の関係を総合的に解析・検討することであり、基調講演1件と研究発表10件、総合討論を行なった。参加者は大学や水試など研究機関を中心とした75名であった（水産試験場・水産研究所19名、大学教員等16名、民間4名、行政1名、院生・学部生35名）。

水産海洋学会渡邊良朗会長と北海道大学大学院水産科学研究所の原彰彦院長の挨拶に引き続き、コンビナーを代表して高津が趣旨説明を行い、午前中の発表を行なった。三宅（北大院水）は今回の基調講演で、噴火湾の海洋構造は従来から知られている海洋構造の季節変化に加えて、陸上地形と関連した季節風の影響も大きいこと、また夏や秋の低気圧通過によって冷水塊が湾内に流入する過程について詳細に説明した。高橋（愛媛大CMES）は夏季噴火湾表層水の形成機構や、同水塊の時計回りの渦流の位置が南東季節風によって大きく変化することを述べた。築田（北大院水）は、夏季や秋季に噴火湾最深部海底付近にみられる貧酸素水塊について発生状況を報告し、その発生機構の仮説を提示した。品田（道網走水試）は、沿岸親潮の流入が噴火湾に独特な春季ブルームを生じさせ、植物プランクトンの属組成の優占度も変化させることを解説した。

午後に入って岩川（北大院水）は、近年の噴火湾の低ベントス豊度がアカガレイの成長を遅滞させ、肥満度も低下させていること、真鍋（北大水産学部）は、1995-1997年の貧酸素水塊発生時には底生魚類群集の豊度も低下し、それ以降は小型甲殻類食魚類以外の豊度は回復していることを報告した。栗田（道函館水試）は、えびかご漁業で漁獲されるトヤマエビの小型個体は低水温年に成長が停滞し、漁獲量も低下する傾向があること、宮園（道函館水試）は、ホタテガイ養殖技術の発展が漁業者の生活を改善してきた歴史、海域利用の高度化の実態、安定生産への課題を要約して説明した。一方、中尾（道栽培水試）はホタテガイ養殖に関して、漁家経営の側面から問題点を提起し、買受側資金量（融資）の制限が高生産年に価格低下を招いている実態を浮かび上がらせた。馬場（道函館水試）は、ホタテガイ養殖の成否の鍵を握る天然種苗の採捕量は、母貝の栄養状態と環境中の植物プランクトンの豊度などでうまく説明できること、奥村（道函館水試）は、ホタテガイ幼生の拡散過程と海洋構造の関係を説明し、稚貝の斃死と気象擾乱の因果関係に関する仮説を提示した。

発表の直後や総合討論では、噴火湾の海洋環境や海面の高度利用の実態について、参加者の認識のずれを埋めるべく質疑応答が非常に活発にやりとりされ、忌憚のない意見が相次いだ。また、データの解釈や解析方法などについて有益なアドバイスもあった。本シンポジウムは、噴火湾の独自性を浮かび上がらせると同時に、この海域の漁業が自然環境に左右されやすいこと、近年では人為的要因も無視できないレベルに達しており、海域保護と保全に向けた新たな指針が求められていることを確認した。またこれまで以上にモニタリングの継続が重要であり、例えば道水試と北大で情報の共有化を進めるべき、との意見も述べられた。また今後は、他の水域の先進的な事例を取り入れて見習う必要もある。

